



日本歯科大学新潟病院

IVY NEWS LETTER

Vol.53
2024.12.1

～地域歯科診療支援病院と地域医療の融合を目指して～

歯学教育機関としての新潟病院

新潟生命歯学部 教務部長
新潟病院 副病院長
佐藤 聡



日本歯科大学新潟病院は、患者に歯科医療を提供するとともに、歯科医師を目指す医療人の養成のための教育機関としての機能も有しています。また、新潟病院は、新しい医療技術の研究・開発を行う研究機関として、さらに高度の歯科治療技術を含めた医療を地域住民に提供する中核的医療機関として、重要な役割を果たしています。

現在、歯科を取り巻く環境は、人口構成の変化や、歯科疾患罹患状況の変化に伴い、これまでの歯の形態の回復を主体とした「治療中心型」の歯科治療だけでなく、口腔以外の疾患の関連と状況をふまえ、関係者と連携しつつ患者個々の状態に応じた口腔機能の維持・回復（獲得）をめざす「治療・管理・連携型」の歯科治療の必要性が増すと考えられています。新潟病院では、このような社会構造の変化を予測し、これに対応した歯科医療従事者の育成と医療の充実に向けて、早期に訪問歯科診療に学部学生を同行させ個々の患者に対応するための関係者との連携を体験・学習できるプログラムを確立しています。令和4年度改訂の医学/歯学教育モデル・コア・カリキュラムにおいても、「人口減地域の増加」、「高齢化率の上昇」、「新興感染症・災害リスクの増大」、さらに「新規科学技術の台頭」といった未来の社会や地域を見据え、多様な場や人をつなぎ活躍できる医療人の養成が求められており、これに対応出来る人材育成のための環境作りが必要と考えています。

歯科においても治療用機器はもとより、臨床基礎実習などで使用するシミュレーション機器において、世界的なデジタル化が日進月歩の勢いで進んでいます。新潟病院では、この急速な変化に対応すべく、コンピューターを用いて歯の詰め物や、被せ物を設計・生産できるCAD/CAM (computer-aided design/computer-aided manufacturing)技術を導入したり、狭い口腔内での治療を支援・記録するためのデジタルマイクロスコープの導入などを積極的に進めています。

予測できる今後の日本で活躍できる医療人の養成の場として、生命歯学部の学部教育、卒後の臨床研修医の教育など各段階において、医師や、コメディカルスタッフ等と生涯にわたって専門性を高められ、医療人としてのキャリア形成に中核的な役割を果たすことができる人材育成を行っていきたいと考えています。



高齢者の歯周治療ガイドライン2023

●歯周病学講座 総合診療科
准教授

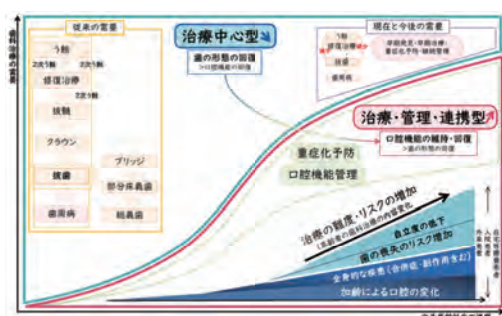
両角 祐子



◆はじめに

わが国の平均寿命は年々延びていますが、その一方で、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間と定義される「健康寿命」の延伸が重要視されています。健康寿命を喪失させる要因として、生活習慣、社会・経済的環境、生活習慣病など多様な要因が挙げられますが、その一つに口腔疾患(歯の喪失、う蝕、歯周病)があるとの報告もあります。

◆歯周病の現状について

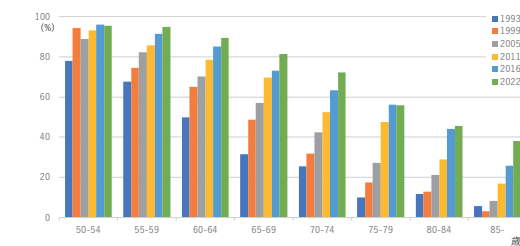


●図1 歯科治療の需要の将来予想(イメージ)

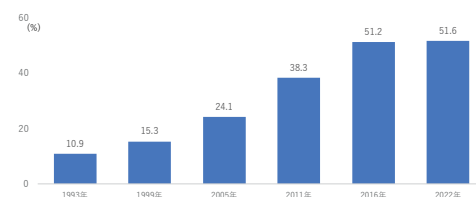
厚生労働省が示す歯科治療の将来予想(イメージ)では(図1)、今後の歯科医療を、人口構成の変化や歯科疾患罹患状況の変化に伴い、歯の形態の回復を主体とした「治療中心型」の歯科治療から、全身的な疾患の状況などもふまえ、患者個々の状態に応じた口腔機能の維持・回復をめざす「治療・管理・連携型」の歯科治療の必要性が増すと予想されています。

います。現在と今後の需要として、う蝕や、う蝕に伴う抜歯は減少していくと考えられていますが、歯周病はどうでしょうか。

1989(平成元)年から厚生省(当時)と日本歯科医師会が取り組んできた「8020運動：80歳になっても20本以上自分の歯を保とう」の結果、運動開始当時8020を達成していた国民は1割にも満たなかったものが、調査を重ねるごとに増加し、2016(平成28)年には5割を超えるようになりました(図2、3)。2022(令和4)年の歯科疾患実態調査では4mm以上の歯周ポケットを有する者の割合は全体で47.9%で年代とともに増加

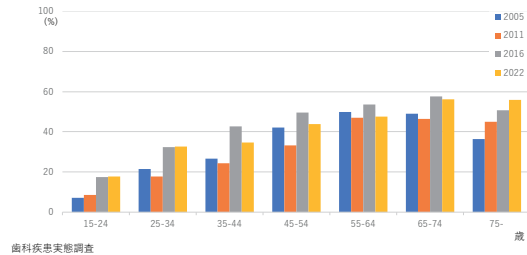


●図2 20本以上の歯を有する者の割合の年次推移



●図3 8020達成者割合の年次推移

しており、65-74歳は56.2%ともっとも高く、75歳以上では56.0%でした(図4)。特に、75歳以上では4mm以上の歯周ポケットを有する者の割合は年々増加傾向にあります。これらの結果が示すように、高齢化と歯周ポケット保有者の割合が増加することは歯周病患者の増加に直結することになります。



● 図4 歯周ポケット(4mm以上)を有する者の割合の年次推移

◆ガイドラインについて

高齢者であっても歯周治療の進め方にかわりはありませんが、高齢者の特性に沿って治療を進めていく必要があります。歯周治療を行う通院患者の中心的な年齢は65-74歳で、75歳以上の高齢者も少なくありません。しかし、通院可能な高齢者であっても、健康で自立した人やフレイルの段階にある人、また認知機能の低下した人などさまざまです。そのため、高齢患者に安全に通院してもらうためには、転倒に配慮したバリアフリーの設備、余裕をもった診療時間、スタッフの教育などの対応も必要となります。

歯周病と全身疾患の関係が着目され、国民の約3割を占める高齢者に対する歯周治療は、口腔と全身の健康を維持する点からも重要であることから、特定非営利活動法人 日本歯



● 図5

周病学会では歯周病および歯周治療の正しい理解と、高齢者に適切な歯周治療を行うことで、高齢者の口腔保健の向上のみならず、全身の健康維持および増進に寄与することを目的とし、『高齢者の歯周治療ガイドライン2023』を発刊しました(図5)。また、高齢者では、歯周治療の際も口腔機能の低下への対応が求められてきています。歯周治療で来院した際は、「咀嚼機能」、「舌・口唇の機能」、「嚥下機能」など口腔の機能にも注意するとともに、低栄養に伴う体重減少、誤嚥性肺炎を示唆する発熱の状況などを確認することは、口腔機能の低下や全身疾患のリスクの高い高齢者を抽出する一助になると考えられます。

◆最後に

日本歯科大学新潟病院では、歯周病専門医、歯周病認定医を中心に、ガイドラインに沿って歯周病に対する予防、治療、管理を行っており、高齢者の特性に配慮した歯周病の継続管理をいたします。





歯学部新入生における 運動、食生活の実態調査 —BMIとの関連について—

●スポーツ歯科外来 医長
訪問歯科口腔ケア科 講師

渥美陽二郎



◆はじめに

近年、学生の食生活の乱れと運動不足による生活習慣病の低年齢化が言われており、特に多くの大学新入生は、居住形態や教育環境が大きく変化する「転換期」にあたることから、大学生活の中でもこの時期に生活指導を行うことは有意義かつ重要であると思われます。そこで、スポーツ歯科外来では、歯学部新入生に対し学生の健康管理・指導に役立てることを目的として、生活習慣の中で運動、食生活に焦点を当てて10年間の実態調査を行い、生活習慣病の要因である肥満の程度を表す指標の一つとして広く使用されている体格指数(body mass index: BMI)との関連について検討しました。

◆方法

●表1 運動についてのアンケート内容(文献より改変)

質問	選択肢
運動を行っていますか	a. はい b. いいえ
運動する頻度は	a. 週3日以上 b. 週1～2日程度 c. 月1～3日程度

●表2 食生活についてのアンケート内容(文献より改変)

質問	選択肢
朝食を食べますか	a. 毎日 b. 週1回食べない c. 週2～3回以上食べない d. 飲み物のみとる e. 食べない
間食をしますか	a. 毎日 b. 週1回食べない c. 週2～3回以上食べない d. 食べない
夜食を食べますか	a. 毎日 b. 週1回食べる c. 週2～3回以上食べる d. 食べない

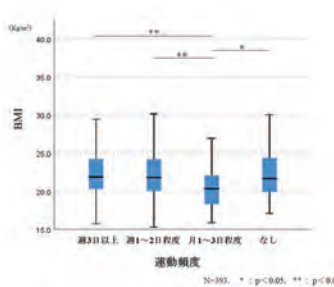
調査は、2009年から2018年度までの10年間で、日本歯科大学新潟生命歯学部(以下本学)新入生659名(男性393名、女性266名)を対象とし、入学直後に運動および食生活についてアンケート調査を行い、BMIは日本肥満学会基準の肥満判定を参考に評価しました(表1、2)。

◆結果および考察

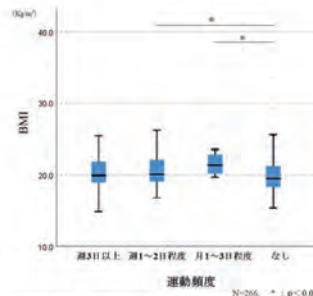
男性の平均年齢は19.3±2.5歳、女性は19.0±1.6歳で、BMIの平均は男性で22.5±3.6kg/m²、女性で20.4±3.0kg/m²で、「普通体重」であり標準的な体型をもっていました。

1. 運動についての結果

運動習慣について、男性は70.7%、女性では48.1%が運動を「行っている」と回答しました。運動頻度については、男性は「週3日以上」が49.6%、次いで「週1～2日程度」が43.2%、女性は「週1～2日程度」が53.9%、「週3日以上」が39.8%という回答が多くみられました。BMIと運動の有無に関して検定を行ったところ男女ともに有意な差が認められました。また、男性は運動頻度、女性は運動習慣の重要性が示唆され、男女別の指導が必要であると思われます(図1、2)。日本肥満学会の肥満症診療ガイドライン2022では、肥満症の要因の1つとして運



●図1 BMIと運動頻度の関係
(男性)(文献より改変)



●図2 BMIと運動頻度の関係
(女性)(文献より改変)

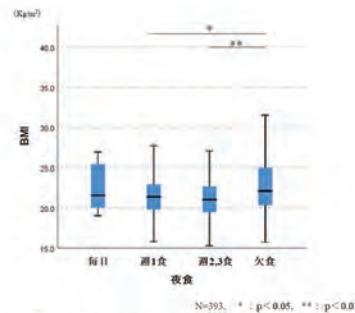
動の有無が関連しており、肥満症の治療において食事療法とともに運動療法が挙げられています。そのため健康維持・増進のためには運動部の入部や地域のスポーツクラブへの参加などを勧める必要があると考えられます。

2. 食生活についての結果

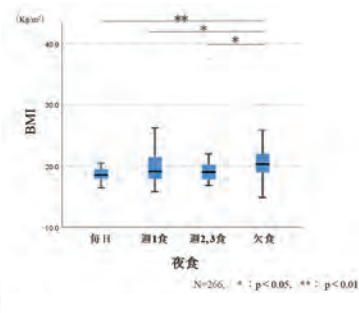
朝食の摂取に関して、男性では「毎日食べる」が51.7%、「食べない」が14.8%、女性は「毎日食べる」が63.9%、「食べない」が5.6%でした。また、今回の結果では男女共にBMIと朝食摂取の有無、朝食の頻度との間で有意な差は認められず、朝食の摂取はBMIに影響を及ぼしていないことが示唆されました。しかし、学年が上がるごとに朝食の欠食率が高くなるとの報告があり、今後は新入生だけでなく他の学年でも調査を行い、朝食の摂取状況を把握して適切な指導が必要と考えられます。

間食の摂取に関しては、男性では約70%、女性では約80%と女性の方が男性より間食率が高く、BMIと間食摂取の有無、間食の頻度との間で男性は有意な差を認めませんでしたが、女性では有意な差が認められました。間食は脂質やコレステロールの摂取量増加、食物繊維の摂取量減少に関連するとともに、高トリグリセライド血症のリスクファクターになり得ると報告されています。

また、夜食の摂取に関しては、男性では43.5%、女性では25.6%が摂取しており、BMIと夜食摂取の有無、夜食の頻度との間で男女共に差が認められ、夜食を摂っている者はBMIが有意に高いことが分かりました（図3、4）。今後、大学新入生において、間食、夜食摂取に対し肥満のリスクや摂取時の食品選択など栄養教育についても重要と思われます。今後はBMIと間食、夜食のエネルギー摂取量との関連についても検討していく必要性があると考えています。



● 図3 BMIと夜食摂取の関係
(男性) (文献より改変)



● 図4 BMIと夜食摂取の関係
(女性) (文献より改変)

◆最後に



● 図5 受賞の盾

今回の調査をまとめた論文は、2024年10月12日(土)～13日(日)に、大阪で開催された第35回日本スポーツ歯科医学会総会・学術大会にて、令和5年度日本スポーツ歯科医学会論文奨励賞を受賞することができました(図5)。将来、国民の健全な食育に関わる歯科医師となる歯学部新入生にとって、人々の健康を守る前に自身の健康について関心を持つことは重要であると思われます。現在、本学1、2年生の教育カリキュラムにおいて健康科学の授業を行っており、そのなかで食育や栄養指導についても講義しています。今後は、今回の調査で得られた結果と関連して、授業後の教育効果について検討することで、大学生が心身の健康を自己管理出来る能力を身に付けられるように運動や食生活の改善支援を進めていき、自らの健康意識を高めていくよう指導していく必要があります。

【参考文献】

渥美陽二郎、猪子芳美、宇野清博：歯学部新入生における運動と食生活の実態調査およびBMIとの関連、スポーツ歯誌、27：1-9、2024。

■ 地域医療連携室よりお知らせ

■ 来院報告書の様式変更について

平素より本院の地域医療連携業務につきましてご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、本年7月よりご紹介いただいた患者さんの来院報告書をハガキよりFAXへと変更させていただきました。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

またFAX送付の際、FAX番号をお問い合わせさせていただくこともございますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



■ 年末年始の休診のご案内

令和6年12月28日(土)～令和7年1月5日(日)まで休診となります。
1月6日(月)より通常通りの診療となります。ご迷惑をおかけしますが、何卒よろしくお願い申し上げます。



■ 第10回ロビーコンサートを開催しました



令和6年11月20日、病院1階ロビーにてチェロ演奏によるロビーコンサート開催しました。チェロ奏者の前田美華さん、小松みゆうさん、前田さん主宰のCELLO SCHOOL門下生かえで会有志者の皆さんに演奏していただきました。ご来場された皆様からは「とても素敵で心が満たされた。きれいな音色だった。」「入院中に素敵なコンサート!!心がいやされました。」などと感想をいただきました。病院スタッフも心癒されるひと時でした。

地域医療連携室

TEL/025-211-8228(歯科) FAX/025-267-1546
025-211-8257(医科)

編集
後記

■ 暑かった夏もあっという間に終わり、寒い冬がやってきました。皆様のお役に立てたどうかはわかりませんが、本年度は大変ありがとうございました。来年もまた宜しくお願い申し上げます。

今回は、巻頭言を大学の教務部長でもある副病院長の佐藤先生に病院における教育について、高齢者の歯周病治療の現状とガイドラインについて両角先生に、スポーツ歯科外来渥先生のライフワークとも言える10年間に及ぶ歯学部学生の食生活実態調査について掲載させていただきました。来年も様々な情報をお届けしたいと思いますので今後とも宜しくお願い申し上げます。良いお年を。(小根山)